

学外研究制度成果報告書

2016年 11月 25日

立命館大学長 殿

所属： 経営学部 職名： 教授 氏名： 八重樫 文 印
(自署または記名・押印)

このたび学外研究を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。

研究課題	デザイン・ドリブン・イノベーションにおけるデザイン・ディスコースの実態分析		
種 目	<input type="checkbox"/> 学 内 研 究	<input type="checkbox"/> 国 内 研 究	<input checked="" type="checkbox"/> 国 外 研 究
区 分 等	<input checked="" type="checkbox"/> 一 般	<input type="checkbox"/> 若 手	<input type="checkbox"/> ライフワークバランス <input type="checkbox"/> 学外資金 <input type="checkbox"/> 役職終了者に対する研究回復措置 <input type="checkbox"/> 助教
研究期間	2015年 9月 26日 ～ 2016年 9月 25日 (12ヵ月間)		
滞在先国名 (複数ある場合は全て記入してください)	ミラノ工科大学：イタリア	<input checked="" type="checkbox"/> 国外のみ <input type="checkbox"/> 国内のみ <input type="checkbox"/> 国内__ヵ月、国外__ヵ月	
研究日程 概 要	期 間		滞都在都市名
	①	2015年9月26日 ～ 2016年9月25日	ミラノ
	②	201 年 月 日 ～ 201 年 月 日	
	③	201 年 月 日 ～ 201 年 月 日	
	④	201 年 月 日 ～ 201 年 月 日	
	⑤	201 年 月 日 ～ 201 年 月 日	
1. 実施概要：研究方法や、上記研究日程に即して実施した概要を記述してください。			
<p>ミラノ工科大学の研究機関 DIG (Department of Management, Economics & Industrial Engineering: 経営工学研究所) に客員研究員として在籍した。そこで、所属教員・研究員・phD 院生とともにディスカッションを行いながら、本研究課題について以下の 2 フェーズに分けて研究を進めた。</p> <p>1. デザイン・ドリブン・イノベーション理論の精緻化と応用事例の分析 同機関所属教員であるロベルト・ベルガンティ教授の唱えるデザイン・ドリブン・イノベーション (モノの新たな意味を創出するイノベーション戦略) 理論の精緻化のための事例分析を進めた。ベルガンティ教授との議論を進めるなかで、教育産業におけるデジタルテクノロジーを利用したツール・サービスを対象にしたデザイン・ドリブン・イノベーションの事例検証が十分でなく、その分析がこの理論の精緻化に貢献する可能性が大きいことがわかった。よってその対象領域に着目し、これまでの教育・学習の意味を変えるテクノロジーの事例の分析を行い、論文を執筆し、国際学会への投稿と発表を行った。</p> <p>2. デザイン・ディスコースの実態分析 デザイン・ディスコースとは、経営者・メーカー・デザイン会社・ユーザー・供給業者・支援サービス・大学・研究機関・展示会・出版社などのデザインに関わる多様な参加者で構成される、デザインの価値を共有する者同士のネットワークのことである。このデザイン・ディスコースを有効に活用していることが、イタリアの製品開発プロセスの最大の特徴であるとされている。 よって、その実態分析のために、ミラノの商業店舗デザイン事務所、建築デザイナー、家具デザイナー、プロダクトデザイナー/大学講師、デザイン研究者、総合家電メーカー、デザインジャーナリストなどへのインタビューを行い、彼らの思考・信念・志向などを分析した。さらに、この分析結果の一部に関する論文を執筆し、国際学会への投稿と発表を行った。 また、イタリアのデザインマネジメントおよびデザイナーの思考方法の特徴を、このヒアリングおよび文献から収集・考察し、論文執筆を行った。</p>			

2. 研究成果の概要：研究成果について、概要を記入してください。

本研究の成果は以下の3点である。

1. 教育・学習の意味を変えるテクノロジーの事例分析論文の発表

滞在先であるミラノ工科大学のベルガンティ教授が提唱するデザイン・ドリブン・イノベーションとは、①「意味の急進的なイノベーション」と「テクノロジー・エピファニー（技術の啓示・顕現）」、②「デザイン・ディスコース」という要素から構成される。ベルガンティはイタリア企業における製品開発事例を分析し、そこには市場ニーズに応える漸進的な進歩ではなく、人々への提案を行うためにモノの意味の急進的な変化を促す「意味の急進的なイノベーション」が中心に行われていることを明らかにしている。さらに、そこでは意味と技術が相互に作用することで、モノの新しい意味が姿を見せる。この相互作用の領域をベルガンティは「テクノロジー・エピファニー」と呼んでいる。

昨今、教育産業におけるデジタルテクノロジーを利用したツール・サービスが発展しているが、これらの事象に対して、この「意味の急進的なイノベーション」と「テクノロジー・エピファニー」という観点から分析した研究はまだ少ない。よって、このような研究を進展させることができれば、デザイン・ドリブン・イノベーション理論の今後の精緻化に資するものと考え、研究を進めた。

具体的には、教育・学習の意味を変えるテクノロジーの事例として、高等教育における MOOCs (Massive Open Online Courses) を取り上げ、これらに対して「意味の急進的なイノベーション」と「テクノロジー・エピファニー」の視点から分析を行った。この成果をまとめたベルガンティとの共著論文を R&D Management Conference 2016 (イギリス・ケンブリッジ大学にて 2016 年 7 月 3 日～6 日開催) に投稿し、採択され、発表を行った。

2. イタリア製品開発におけるデザイン・ディスコースの実態と、そこに関わる日本人関係者の特性の分析

イタリアのデザイン研究者と実践者へのヒアリングおよび資料調査から、イタリアの研究者が行うイタリアの製品開発事例分析には豊富な蓄積があり、文献も豊富にあることがわかった。特に、ミラノ工科大学のデレツァ助教授が執筆している書籍 (Dell'era, C. (2011), *Language Mining*, Lambert Academic Publishing.) に、イタリア製品開発におけるデザイン・ディスコースの実態が精緻に分析されていることを、本人からの紹介で知った。当該書籍は現在英語版のみのため、日本での当該研究分野の発展への寄与を意図して、日本語翻訳作業と出版準備を進めた (現在進行中)。また、ベルガンティ教授も 2017 年 1 月にデザイン・ディスコースの実態を精緻に分析した内容の書籍の刊行が予定されており、こちらの日本語翻訳と出版準備も進めた (これも現在進行中)。

この一方で、イタリアのデザイン業界には多くの日本人デザイナーやその関係者が存在しているが、その活動の実態は学術研究の視点からほとんど明らかにされていないこともわかった。そこで、イタリアでの製品開発・デザインにおいて活躍している「日本人デザイナー／日本人デザイン関係者」を対象にしたインタビュー調査に特に力を入れ、イタリア製品開発におけるデザイン・ディスコースの実態分析と彼らのデザイン態度 (デザインに対する信念・志向) を明らかにした。この分析結果と考察の一部をまとめた論文を R&D Management Conference 2016 (イギリス・ケンブリッジ大学にて 2016 年 7 月 3 日～6 日開催) と 17th International CINet Conference (イタリア・トリノ工科大学にて 2016 年 9 月 11 日～13 日開催) に投稿し、採択され、発表を行った。

3. イタリアにおけるデザインマネジメント研究の特徴と動向の把握

現在日本でもビジネスにおけるデザインの重要性に注目が集まり、デザイン思考の活用への興味・関心が高まっている。しかし、そのほとんどはアメリカ発の狭義のデザイン思考であり、より広い世界の多様なデザイン論やデザイン研究が追究してきた成果が参照されていない。今回ヨーロッパ／イタリアに滞在するなかで、特にこのことを強く感じた。

よって、この事態を看過せず、世界の多様なデザインの思考方法やその知見を、現在の日本のビジネス社会に十分に還元・流通させることを、喫緊に取り組むべき課題として改めて認識するに至った。

そのためにまず、イタリアのデザインマネジメント研究の特徴とその動向について、研究者とデザイン実践者へのヒアリングおよび関連研究文献からの情報収集を行い、論文を執筆し発表した (立命館経営学第 55 巻第 2 号 (2016 年 9 月) に採録)。

また、ミラノの調査で出会ったイタリア在住の日本人デザインジャーナリストとともに、ヨーロッパおよびイタリアにおけるデザインマネジメントの知見を積極的に日本に流通させ、理解を促すための方策を検討した。具体的には、書籍の執筆・出版 (2017 年 1 月出版予定) および、ミラノ工科大学のデザインマネジメント教育プログラムの日本での展開の準備を進めた (現在進行中)。

氏名

八重樫 文